のど自慢

益池　成和

ここのところ日曜昼の楽しみはもっぱらＮＨＫの「のど自慢」である。母親から頼まれた買い物を近くのデイリィーカナートイズミヤで済ませ、そこで買ってきた昼の食材を応接間のテーブルに持ってきて、３５０の缶ビール片手に、４２型の液晶テレビのリモコンスイッチを押す。たいていは十五分ある昼のニュースを見たあと、そのままチャンネルを変えずに何の変哲もない素人の歌番組を見る。むろんプロの歌手も毎回二組出てきて最後の審査発表前に歌うのだが、まあ、実に単純といえば単純な番組である。一応五、六人編成の生バンドの伴奏付きになっているが、やっていることは、要するに何処の街にもあるカラオケ店と何ら変わらない。が、これが結構面白い。

日曜の昼に「のど自慢」を見出したのはいつからだったろうか。たしかまだ親父が生きていた頃、私は全く違う番組を楽しんでいた。今カンテレなどと称しているが、それなりのこちらも長寿番組であった「ノックは無用」にほぼ欠かさずチャンネルを合わせていた。すでにその頃、私は応接間に陣取り、父と母は居間にいて違うテレビに向かっていた。

両親がいつから一緒に「のど自慢」を見出したのかは定かではないのだが、私には父と歌番組の取り合わせが意外であった。母は随分と昔から歌うことが好きだったから分かるのである。もしかすると唯一の趣味と云えるかも知れない。母が五十前後の一時期、その頃は父が毎晩のように飲み歩いていた頃と重なるのだが、ひどい出不精のくせに、一人で藤井寺や八尾の歌謡教室に通ったりもしていたから。あるいは、父の夜の不在を、歌が癒やす役割をはたしていたのかも知れない。

大阪市内の子供服の会社に通いながらも、町会の役を引き受け続けたこともあって、それこそ毎晩のように、自治会のメンバーを引き連れ、父は近所の飲み屋を渡り歩いていた。私にも多少その傾向があるのだが、その飲み方が、いわゆる梯子酒という奴で、アルコールが全身にまわると気が大きくなってしまって、次から次へと店を移る。むろん行った先で水で済ませるわけもなく、時間は深夜に及び、泥酔が待っているだけである。そして気がつくと一緒にいたはずの人達はいつの間にか姿を消し、ひとりでなじみの居酒屋に転がり込んでは、よく私に迎えに来るよう店のママに電話をさせたりしていたものであった。私にとってはいい迷惑でしかなかったが、あの頃が父にとって一番元気でいい時だったかも知れない。今ならたいていの飲み助はカラオケスナックにたどり着いてお開きとなるのだが、父が元気いっぱいだった頃は、ようやく歌を唄わせる店がぽつりぽつりと現れだした時期でもあった。だからだろうか、私は父が歌を唄うところを見たことがなかった。おそらく得意でもなかったはずである。

むろん面と向かって口にしたことはなかったが、私が「ノックは無用」ばかり見ていた頃、居間から流れてくる素人の歌声を聞きながら、なんてださい番組を見ているのだろうかと密かに呆れていた。こんな番組のいったい何処が面白いのだろうかと。

ところが、これがめっぽう愉快なのである。もちろん素人参加の歌番組なのだから上手い人も何人かいるのだが、歌の優劣より、参加者の個性が目をひきこれがとにかく楽しい。

仮装大会よろしく手作りの羽根の付いたドレスを着てきたり、段ボールで切り抜いてきたギターもどきのものを背中にしょってきたり、はたまた、自分の畑で収穫してきたタマネギなどを腰に巻き付けて夫婦でデュエットしたりと、まさに多種多様である。そして何よりもいいのが、誰も彼もが笑顔であること。司会者のもって行き方がいいのだろうが、出場者のちょっとしたエピソードを小出しにして、その人の人柄や人生が分かるような気にさせてしまうこともこの番組の魅力だろう。

いつの間にかださい番組と決めつけ半ば軽蔑していたものが、今では欠かさず見る昼のお楽しみになっている。人間変われば変わるものである。父に「なにこんな番組見てるんや」とよくぞ言わずにいたものである。

人は歳を重ねれば考えや好みが変わってしまう。おそらく今のわたしが「のど自慢」を愛するようになったのは結局のところそういうことなのだろう。そして又もう一つ、これも知らず知らずに受け継いでしまった何かなのかも知れない。

父との記憶で忘れられない情景がある。結局のところ私は結婚しなかったこともあって、父が死ぬまで同じ屋根の下にいた。おそらく母ともそうなるだろう。生前面と向かって尋ねてみたことはなかったが、父はどんなに忙しくてもできる限り夕食は家族みんなでテーブルを囲むことを大切にしていた節がある。小さい頃は曖昧だが、三十過ぎて二人兄妹の妹が近くの葡萄農家に嫁いでいった後も、それは変わらなかった。大抵は夫婦が先に食卓に座っていて、二階から降りてきてわたしがテーブルにつく。椅子に座るまで、父は決まってわたしを目で追うのである。一時その眼差しがたまらなく嫌だった。わたしがいい中年になってもそれは変わらなかった。父は決して厳格な性格ではなく、たいして小言を言われた記憶もない。どちらかというと、わたしには甘い父親だったはずである。

わたしにはこの家に居続ければ、少なくとも食うに困ることはない、と思った記憶がある。おそらく、周りの農家に先んじてトヨタに土地を貸し出してからのことだったに違いないから、わたしがまだ中学生だった頃のことだったろう。いささか中学生の男にしてはずるいその時のもくろみは、今のところ、外れてはいなかったことになる。

今のわたしは父から受け継いだ土地を他人様に貸し出して、それで日々の糧を得ている。その賃貸業の様は、農家を受け継いだ父が思い悩み一念発起して始めたことで、いわばわたしはそれをひたすらなぞり続けているに過ぎない。そこに何の努力もなければ創意工夫もない。にもかかわらず、多少実入りがいいこともあって、自分では結構偉そうな顔して生きている。それもこれも、正面切っては認めたくはないけれど、父が残してくれた何かのおかげと云うしかない。

わたしが「のど自慢」を見出したのは父が死んでからのことである。きっかけは分からない。たまたま日曜の昼にＮＨＫにチャンネルをあわせたところ、映し出された参加者の笑顔に惹かれ見入ってしまった。多分そんなところだろう。父が好きだった番組であったと気づいたのは、随分と時がたってからのことである。結局のところ、「のど自慢」を愛することさえわたしは、父の後をなぞってしまっていたのである。